養護教諭を志望する学生の養護教諭イメージと職務意識の特徴
―講義による変化―

久　保　昌　子
（発達教育学研究科博士後期課程）

本研究の目的は，養護教諭を志望する学生について，(1) 養護教諭の職務に対する意識と養護教諭のイメージの特徴を明らかにすること，(2) 講義の中で情報提供をすることによって，職務に対する認識や養護教諭のイメージがどのように変化するかを明らかにすること，(3) どのような要因が，養護教諭のイメージや養護教諭志望に影響するかを検討することであった。女子大学の学生176人（生活福祉学専攻52人，児童学専攻65人，心理学専攻59人）を対象に，質問紙調査を実施した。生活福祉学専攻の学生については，講義終了後再び同じような調査を行った（前後比較可能なデータは49であった）。「保健室来室の理由」「仕事の重要性や連携の必要性」「養護教諭のイメージ」「養護教諭への志望動機」それぞれについて因子分析を行い，因子に対応する尺度を構成して信頼性を確認した。主要な結果は次の通りであった。①養護教諭を志望する学生は他学部専攻の学生よりも小学校での保健室利用頻度が高く，仕事の重要性および連携の必要性についての得点が高かった。②授業前後の比較では，小学校のイメージは【温かさ・魅力】【勤勉・憧れ】【働きがい】得点のすべてが高くなり，【環境衛生・地域連携】の重要性得点も高くなった。中・高等学校のイメージは，【勤勉・有能】が高くなったが【魅力】は低下し，【保健管理・保健指導】の重要性得点も低くなった。③パス解析の結果，小学校では【児童への発信】【健診・救急処置】の重要性の認識が高いほど【温かさ】【勤勉】【魅力】のすべてイメージが高かった。一般に保健室での【心身の相談】が多いほど【小中高校でのよい経験】の志望動機を高め，さらにそれが「養護教諭になりたい気持ち」を高めていた。また，授業を通じての影響は，小学校では，【健診・救急処置】【組織対応】における連携の必要性の認識が高まるほどに「養護教諭になりたい気持ち」が高かった。中・高等学校では【生徒・地域への発信】の重要性の認識が高まるほど「養護教諭になりたい気持ち」が高かった。以上のことから，短期間であっても，具体的な資料提供を継続することによって，養護教諭を志望する学生の意識やイメージが変わることが示唆された。

問　題

養護教諭の役割と保健室の機能は，時代の変化に伴って多様に変化してきた。保健室の機能について，森（2002）は，歴史的変遷の中から次のように分類している。昭和40年頃までは救急処置に訪れる児童生徒だけを対象とした保健室を「閉ざされた保健室」と命名したが，昭和47年（1972）の保健体育審議会答申によって，「開かれた保健室」の機能が追加されたと述べている。すなわち，健康に関心があったり，相談したいことがあったりする場合にも利用することができる保健室へと対象が広がったことを示している。平成９年（1997）の保健体育審議会答申では，組織的に解決をしなければならないような深刻な健康問題の増加をふまえ，保健室を「学校保健の組織的活動の拠点」ととらえている。たとえば，「保健室登校」を例に挙げると，保健室登校は不登校傾向の児童生徒を保健室で養護教諭が対応している状態を示し，社会的にも広く知られる言葉となった。しかし，

子どもたちが抱える問題は複雑化，深刻化し，保健室だけで抱えきれず，学校内外の組織で対応しなければ解決できないような問題が増加したといえる。

現在，大学で学ぶ学生たちは，おそらく開かれた保健室に来室していたと考えられる。彼らが来室していた保健室は相談に応えてくれる場であると同時に，「学校保健の組織的活動の拠点」として機能している保健室であったはずである。養護教諭を志望する学生の中には，不登校をはじめとする様々な心の問題を抱えた経験をもつ者も含まれている可能性もあると考えられるが，学生が持つ養護教諭イメージと実際の職務の狭間をどう埋めていくかが，養成における課題ではないかと考える。

養護教諭イメージに関する研究として，大谷・堀江（1985）は，教諭課程学生と養護教諭課程学生との比較をすることによって，養護教諭に対する印象を明らかにした。教諭課程学生からは，養護教諭を否定的にとらえている内容が多く回答されていたのに対して，養護教諭課程学生には「努力によって専門性が生かせる」等の養護教諭の独自性を認めているものが多かった。教諭課程の学生の回答は，当時の養護教諭が置かれている時代背景を映した結果と考えられる。

後藤・萩原・後藤（2011）は，養護教諭イメージが形成される要因について報告している。養護教諭を志望する学生は，これまでの校種で保健室を頻回利用し，これまでに関わった養護教諭を基準としてイメージし，そのイメージは「優しい」「受容」「母」などの語で表されていた。そして，それらのイメージは，養成教育の中で変化することなく，目指す養護教諭の普遍的な資質と考えられていた。

一方，満田・今村（2006）は，学生の養護教諭に対する志向性（養護教諭になりたいと思うか）や適性感（養護教諭が自分に適していると思うか）は学生の持つ養護教諭イメージの変化と関わっていることを明らかにした。そして，養護教諭のイメージは専門の授業から養護実習を通して，大多数はプラスに変化するが，中にはマイナスに変化する事例もあった。養護実習は学生自身が自らを知る機会であるため，養護実習を境に学生の養護教諭志向性や適性感が変化すると考えられ，学生支援の在り方を見直す必要性を述べた。

下村（2010）は，養護教諭養成課程を志望する学生の動機と養成科目の関心度を調査し，職務内容と関わった養護教諭に好印象を持った者が志望していることを明らかにした。志望動機に関しては，今野（2004）も同様の報告をしている。

本研究は，養護教諭を志望する学生への調査を通じて，次の３点を明らかにすることを目的とした。⑴ 養護教諭の職務に対する意識と養護教諭のイメージの特徴を，他学部の学生と比較することを通じて，明らかにする。⑵ 大学の講義の中で具体的な情報提供をすることによって，職務に対する認識や養護教諭のイメージ，養護教諭になりたいという気持ち（養護教諭志望）がどのように変化するかを明らかにする。⑶ どのような要因が，養護教諭のイメージや養護教諭志望に影響するかを検討する。

仮説は，以下の通りである。

養護教諭を志望する学生は，他学部の学生と比べて，養護教諭の仕事をより重要だと認識し，肯定的な養護教諭イメージを持っているだろう（仮説１）。その重要性の認識やイメージは，下村（2010）や今野（2004）が述べたように，今まで関わった養護教諭や保健室に来室したときの経験を通して作り上げられたものではないかと考える。

さらに，生徒として保健室を利用し，養護教諭を志すきっかけとなった養護教諭の職務は，主として健康教育や健康診断・救急処置に関する職務ではないだろうか。それらの職務に共通するのは，児童生徒に直接関わり，養護教諭の専門性として理解されやすいという点といえよう。しかし，実際の養護教諭の職務は，他の教職員や校内外の組織に働きかけて行うような連携に関わる部分が必ず含まれており，平成20年（2008）の学校保健安全法では，コーディネーターとしての役割が求められている。この連携

に関わる部分は，実際に勤務してみないと理解することが難しいといえる。

そこで，NIE（Newspaper in Education）の手法を「教育方法概論」の講義の冒頭に取り入れ，連携に関わる具体的な事例を通して理解を促した。内容は次の通りである。1回目：色覚健診の現状と課題[1)]，学校での予防注射が無くなった[2)]，2回目：現場の本音・中学校の養護教諭[3)]，保健室登校 子どもが問いかけるもの[4)]，子どもの色覚異常[5)]，排便への偏見[6)]，3回目：食物アレルギー 給食が問う命と教育[7)]，就学時健康診断[8)]，増える保健室登校[9)]，4回目：過敏性腸症候群[10)]，健康観察・健康診断と学校医[11)]，5回目：虐待を超えて[12)]，学生時代を振り返って[13)]，チャイルドライン～安心して悩み語れる場を[14)]，6回目：摂食障害[15)]，歯と口の健康・児童保健委員会活動・学校保委員会・誘拐の防止[16)]。以上，具体的な事例にふれながら，職務における"連携"の理解を促すような授業を提供した。本講義の初回と最終回で得られたデータを比較することによって，学生の意識やイメージがどのように変化するかを明らかにしたい。

講義のなかで，毎回，連携に関わる具体的な事例を提供をすることにより，後藤他（2011）が述べた「優しい」養護教諭イメージだけでなく，養護教諭の職務をより深く理解した上でのイメージをもつように変化するのではないかと考える。また，永浜・宮城（2005）は，学生の自由記述を分析した結果，講義後に〈他職種，地域，家庭と連携しネットワークを作る場〉というテーマが抽出され，保健室の役割の一つに校内外との連携が重要であるとの認識が生まれたと述べている。

以上のことから，養護教諭のイメージ，及び，「仕事の重要性」と「連携の必要性」の得点は，講義の前より後の方が高くなると考える（仮説2）。さらに，「仕事の重要性」と「連携の必要性」の認識の深まりが，養護教諭のイメージ（特に職務に関わる「勤勉」「魅力」のイメージ）を高めるとともに，養護教諭になりたい気持ちを高めるのではないかと考える（仮説3）。

方　法

1　調査対象

女子大学2回生の学生187人（家政学部生活福祉学科の学生で「教育方法概論」履修し養護教諭を志望する学生（以下，生活福祉学専攻の学生）58人，発達教育学部児童学専攻68人と心理学専攻61人の学生）を対象に，質問紙調査を実施した。そのうち，有効回答が得られた176人のデータについて分析を行った。その内訳を表1に示す。

表1　分析対象の内訳人数

学科	生活福祉	児童	心理
人数	52	65	59

生活福祉学専攻の学生については，講義終了時に再び同じような調査を行った。得られた有効データは54，前後比較可能なデータは49であった。

2　調査期間

平成26年6月上旬～7月下旬

3　手続きと調査の内容

平成26年6月上旬に，生活福祉学・児童学・心理学専攻の学生に対して，それぞれ授業の終わりの20分程度で調査を実施し，その場で回収した。質問紙の内容はおおよそ以下の通りであった。

(1)　保健室利用状況

①小，中・高校時代，保健室をどのくらい利用していたか。各校種ごとに，〔0　全然行かなかった〕〔1　あまり行かなかった〕〔2　時々行った〕〔3　よく行った〕の4段階評定を求めた。

②保健室を利用していた理由について，次の理由について4段階評定を求めた。〔1　具合が悪いとき〕〔2　ケガをしたとき〕〔3　友だちのつきそい〕〔4　委員会や係活動として〕〔5　心の相談〕〔6　体の相談〕〔7　身長を測りに〕〔8　石けんやトイレットペーパーをもらいに〕〔9　ただ何となく〕　これらの項目は，木村・大坪（2008）を参考に作成した。

⑵　養護教諭のイメージ

小学校と中・高等学校のイメージをそれぞれに24項目，７段階評定〔１〕から〔７〕を求めた。意味尺度の構成は，野尻・真鍋・中野他（1994）が選んだ26個の形容詞対のうち２項目を除き，24項目とした（表５参照）。

⑶　養護教諭の仕事

小学校と中・高等学校の養護教諭の仕事について，①仕事の重要性，②連携の必要性に関してそれぞれに４段階評定〔０　重要でない〕〔１　少し重要だ〕〔２　かなり重要だ〕〔３　非常に重要だ〕を求めた。次の14項目の回答を求めた。

〔１　健康診断〕〔２　配慮の必要な児童生徒の保健管理〕〔３　保健指導（個別）〕〔４　保健指導（集団）〕〔５　ほけんだより〕〔６　保健の授業〕〔７　委員会活動〕〔８　救急処置〕〔９　心の相談活動〕〔10　感染症の予防〕〔11　環境衛生〕〔12　組織活動〕〔13　配慮の必要な児童生徒への対応〕〔14　地域連携〕，これらの項目は，久保・森下（2011）を参考に選定した。

⑷　養護教諭志望の動機

生活福祉学専攻の学生に対して，７月下旬，最終授業の終わりに，20分程度で，２回目の調査を行った。「養護教諭志望の動機」に関する調査項目を作成するに当たって，４回目の講義に出席した学生（56名）に「養護教諭を志した理由」を自由に記述させ，それをもとに12項目を作成した（表11）。

各項目について〔０　当てはまらない〕〔１　少し当てはまる〕〔２　かなり当てはまる〕〔３　非常に当てはまる〕の４段階評定で回答を求めた。

また，「どの程度，養護教諭になりたいと思っているか」について７段階評定〔１：全く思わない〕から〔７：大変そう思う〕で求めた。

結　果

Ⅰ　生活福祉学専攻生の特徴

１　保健室利用状況

生活福祉専攻の学生と児童学・心理学専攻の学生とをクロス集計（ピアソンχ^2検定）によって比較した。表２の通り，交互作用が有意で，小学校の保健室利用頻度は，生活福祉専攻の学生が高かった。中・高等学校の保健室利用頻度では，有意な関連はみられなかった。

表２　保健室利用頻度のクロス集計(%)：小学校

	全然行かなかった	あまり行かなかった	時々行った	よく行った	交互作用
生活福祉	9（17.3） .1	10（19.2） -2.4	15（28.8） -.6	18（34.6） 3.7	**
心理児童	21（16.9） -.1	47（37.9） 2.4	42（33.9） .6	14（11.3） -3.7	

（　）は% 下段は残差分析結果　**p<.01

２　尺度の分析

⑴保健室来室，⑵養護教諭イメージ，⑶養護教諭の仕事，⑷養護教諭の志望動機について，それぞれどのような因子から構成されているかを明らかにするために，176の全データについて因子分析を行った。手順として，初めに主成分分析によるスクリープロットを参考にして因子数を決め，最尤法（または主因子法）により因子抽出を行い，プロマックス回転を行った。続いて各因子に対応する尺度の信頼性を確認するためにα係数を求めた。その後，各因子に高く負荷する項目の素点の和を尺度得点とした。

⑴　保健室来室に関する因子

小学校では，表３のように２因子が得られた。第１因子は，「ケガをしたとき」「具合が悪いとき」「友だちの付き添い」「委員会・係活動」「石鹸やトイレットペーパー等をもらいに」「身長を測りに」の負荷が高く，【傷病時・係活動】に関する因子と命名した。第２因子は，「心の相談」「体の相談」「ただ何となく」の【心の居場所】に関する因子であった。

中・高等学校では，表４のように４因子が得られた。第１因子は「心の相談」「体の相談」で【心身の相談】に関する因子であった。第２因子は「ただ何となく」「身長を測りに」「友だちのつきそい」の【つきそい】に関する因子であり，第３因子は「具合がわるいとき」「ケガをしたとき」の【傷病時】関する因子であり，第４因子は「石鹸やトイレットペーパー等をもらいに」「委員会・係活動」の【係活動】に関する因子であった。各因子に対応する尺度の信頼性を調べるためにα係数を求めた。

表３　保健室来室理由の因子パターン（小学校）

	来室理由	F1 傷病時・係活動	F2 心の居場所	共通性
2	ケガをしたとき	.862	−.092	.480
1	具合が悪いとき	.733	.033	.460
3	友だちのつきそい	.536	.060	.293
4	委員会・係活動	.394	.080	.219
8	石鹸等をもらいに	.350	−.003	.157
7	身長を測りに	.329	.188	.225
5	心の相談	−.004	.937	.613
6	体の相談	−.023	.816	.576
9	ただ何となく	.189	.371	.247
	寄与	36.551	15.707	
	α係数	0.733	0.753	

表４　保健室来室理由の因子パターン（中・高等学校）

	来室理由	F1 心身の相談	F2 つきそい	F3 傷病時	F4 係活動	共通性
5	心の相談	.983	.077	−.030	−.054	.613
6	体の相談	.636	−.068	.155	.174	.576
9	ただ何となく	.187	.839	−.142	−.093	.247
7	身長を測りに	−.112	.661	.127	.032	.225
3	友だちのつきそい	−.137	.352	.310	.252	.293
2	ケガをしたとき	.007	.000	.934	−.131	.480
1	具合が悪いとき	.282	−.073	.452	.025	.460
8	石鹸等をもらいに	.018	−.078	−.107	.765	.157
4	委員会･係活動	.078	.072	−.027	.588	.219
	寄与	33.322	11.265	7.227	5.915	
	α係数	0.816	0.707	0.599	0.604	

表５　養護教諭イメージの因子パターン（小学校）

	項　目	F1 温かさ･魅力	F2 勤勉・憧れ	F3 働きがい	共通性
14	面白い	.832	.108	.004	.612
19	自由な	.780	.341	.199	.502
5	明るい	.741	−.036	−.059	.521
24	好きな	.630	−.114	.173	.635
1	温かい	−.577	.344	.180	.549
17	魅力的	−.528	.396	.107	.636
3	科学的	.303	.101	−.257	.152
22	安定した	−.299	.266	−.219	.442
15	豊かな	.290	−.198	.167	.357
12	責任感の強い	.077	.689	−.123	.493
4	慎重な	.018	.543	−.015	.366
11	高尚な	.233	.535	−.098	.313
6	勤勉な	−.237	−.475	.335	.339
18	スマートな	−.228	.469	.139	.460
7	親切な	−.238	.429	.082	.427
10	清潔な	−.106	.374	−.070	.366
16	美しい	−.305	.307	−.088	.473
21	価値のある	−.134	−.073	−.695	.511
13	重要な	.119	.052	.695	.481
23	やりがいのある	.047	−.056	.649	.477
8	知的な	−.135	−.264	.455	.372
9	正直な	.142	−.198	.314	.366
	寄与	30.764	6.253	4.240	
	α係数	0.826	0.761	0.771	

いずれの因子にも負荷の低かった「2　理知的」と「20 軽労働」を除外して，因子分析を行った。

表６　養護教諭イメージの因子パターン（中・高等学校）

	項　目	F1 勤勉・有能	F2 温かさ	F3 魅力	共通性
4	慎重な	.778	−.059	−.147	.508
12	責任感の強い	.769	−.164	−.162	.581
6	勤勉な	−.763	.006	.043	.526
8	知的な	−628	−.288	−.211	.426
11	高尚な	.479	.232	.163	.290
9	正直な	−.426	.141	−.055	.413
21	価値のある	.413	−.068	.318	.654
13	重要な	−.408	.099	−.322	.595
20	軽労働	.361	.024	−.044	.292
22	安定した	.316	−.187	.269	.559
1	温かい	.088	−.868	−.166	.599
5	明るい	.055	.667	−.164	.587
14	面白い	.053	.575	−.206	.525
24	好きな	−.099	.506	−.287	.635
7	親切な	.295	−.486	−.034	.460
2	理性的	−.057	−.472	−.062	.255
19	自由な	.207	.468	−.260	.431
3	科学的	.250	.431	.216	,239
16	美しい	−.041	.070	.939	.678
15	豊かな	.144	.181	−.627	.497
18	スマートな	.210	.148	.617	.567
17	魅力的	−.042	−.381	.563	.754
23	やりがいのある	−.195	.205	−.389	.609
10	清潔な	.268	.068	.334	.327
	寄与	37.308	8.550	5.463	
	α係数	0.807	0.666	0.835	

表７　仕事の重要性の因子パターン（小学校）

	項　目	F1 保健管理･保健指導	F2 環境衛生･地域連携	F3 児童への発信	共通性
3	保健指導(個別)	.818	−.208	.006	.473
2	保健管理	.719	−.066	−.111	.426
4	保健指導(集団)	.537	−.059	.243	.509
9	心の相談	.507	.305	−.121	.481
13	配慮の必要な児童への対応	.462	.231	.059	.499
1	健康診断	.435	.044	.058	.376
8	救急処置	.366	.202	−.053	.288
11	環境衛生	−.043	.893	−.083	.547
10	感染症の予防	−.110	.849	−.044	.494
14	地域等連携	.220	.338	.170	.408
7	児童委員会活動	−.099	−.118	.949	.464
5	ほけんだより	.050	−.028	.658	.393
12	校内組織活動	−.043	.400	.460	.495
6	保健の授業	.192	.261	.292	.424
	寄与	38.042	9.803	9.335	
	α係数	0.793	0.738	0.764	

⑵　養護教諭のイメージに関する尺度

因子負荷の高い項目から各因子を表５（小学校），表６（中・高等学校）のように命名し，項目の素点の和をもって尺度得点とした。

⑶　養護教諭の仕事に関する因子

①養護教諭の仕事の重要性（小学校）の因子

小学校の仕事の重要性について，表７のように３因子が得られた。因子間の相関は，.558か

表８　連携の必要性の因子パターン（小学校）

	項　目	F1 保健教育	F2 組織対応	F3 心のケア	F4 健診･救急処置	共通性
4	保健指導（集団）	.887	-.127	.074	.035	.659
3	保健指導(個別)	.654	-.173	.023	.182	.524
6	保健の授業	.590	.148	.047	.009	.493
7	児童委員会活動	.544	.154	-.057	-.023	.367
5	ほけんだより	.454	.127	-.011	.063	.319
11	環境衛生	.067	.867	-.111	-.049	.564
10	感染症の予防	-.138	.730	.101	.218	.582
12	校内組織活動	.423	.534	.044	-.198	.523
9	心の相談	-.001	-.069	.881	.005	.470
13	配慮の必要な児童への対応	.116	.054	.660	-.054	.471
2	保健管理	.079	-.075	.013	.671	.333
1	健康診断	.228	.121	-.136	.607	.415
8	救急処置	-.168	.278	.211	.329	.307
	寄与	36.421	6.659	5.971	4.928	
	α係数	0.803	0.809	0.755	0.641	

表９　仕事の重要性の因子パターン（中・高等学校）

	項　目	F1 生徒･地域への発信	F2 専門的見立て	F3 環境衛生	F4 保健管理･保健指導	共通性
7	生徒委員会活動	.741	-.115	-.070	.007	.356
6	保健の授業	.718	.018	-.112	.133	.521
12	校内組織活動	.578	.087	.381	-.233	.519
5	ほけんだより	.566	.065	-.030	.069	.308
14	地域等連携	.330	.164	.221	.022	.379
13	配慮の必要な児童への対応	.073	.900	-.085	-.077	.553
9	心の相談	.011	.703	.056	-.050	.476
8	救急処置	-.235	.412	.109	.337	.308
11	環境衛生	-.008	-.083	.961	-.030	.605
10	感染症の予防	-.146	.155	.701	.169	.597
2	保健管理	-.031	.058	-.054	.779	.469
1	健康診断	.224	-.324	.179	.510	.461
4	保健指導(集団)	.324	.104	-.028	.420	.580
3	保健指導(個別)	.277	.197	-.006	.393	.580
	寄与	36.000	7.178	5.631	4.483	
	α係数	0.748	0.728	0.814	0.759	

表10　連携の必要性の因子パターン（中・高等学校）

	項　目	F1 保健教育･組織	F2 心･感染症対策	F3 健診･救急処置	共通性
6	保健の授業	.821	-.027	-.123	.499
7	生徒委員会活動	.758	-.100	-.067	.402
12	校内組織活動	.737	.216	-.180	.583
4	保健指導(集団)	.686	-.062	.144	.574
11	環境衛生	.583	.269	.018	.668
3	保健指導(個別)	.449	-.073	.264	.423
5	ほけんだより	.312	-.308	.185	.160
13	配慮の必要な児童への対応	.022	.765	.041	.542
9	心の相談	-.094	.754	.043	.461
10	感染症の予防	.317	.403	.142	.555
2	保健管理	-.064	.018	.863	.462
1	健康診断	.382	-.044	.530	.533
8	救急処置	-.198	.299	.528	.358
	寄与	39.736	12.438	9.693	
	α係数	0.823	0.750	0.725	

ら.602と比較的高い値を示した。

②小学校における連携の必要性の因子

小学校の連携の必要性について，表８のように４因子が得られた。因子間の相関は，.401から.537と比較的高い値を示した。

③養護教諭の仕事の重要性（中・高等学校）の因子

中・高等学校の仕事の重要性について，表９のように４因子が得られた。因子間の相関は，.465から.555と比較的高い値を示した。

④中・高等学校における連携の必要性の因子

中・高等学校の連携の必要性について，表10のように４因子が得られた。因子間の相関は，.418から.520と比較的高い値を示した。

表11　養護教諭を志望した動機の因子パターン

	項　目	F1 子ども支援	F2 小中高校でのよい経験	F3 勧められて	共通性
10	子どもの成長を支えたい	.866	-.099		.726
12	心身の健康に関わりたい	.853	.135		.751
1	子どもに接する仕事をしたい	.764	-.225		.581
8	教育現場で働きたい	.690	-.061		.490
3	予防教育の仕事をしたい	.582	.190		.511
9	悩みを抱える子どもの助けになりたい	.575	.140		.533
4	いじめ・不登校等の子どもを支えたい	.357	.283	–	.384
5	親や先生から勧められた	.239	.115		.101
2	過去に接した養護教諭の印象がよかった	-.099	.859		.635
11	保健室が好きでお世話になった	-.116	.857		.584
6	やりがいのある仕事と思った	.320	.436		.437
7	保健委員をして興味を持った	.155	.338		.249
	寄与	34.406	12.645		
	α係数	0.859	0.722	–	

表12　保健室利用状況の平均値（SD）：小学校

因子名	生活福祉	児童・心理	t 検定
傷病時・係活動	10.7（3.70）	9.3（3.70）	*
心の居場所	1.7（2.11）	0.8（1.37）	***

*p<.05　**p<.01　***p<.001

表13　保健室利用状況の平均値（SD）：中・高等学校

因子名	生活福祉	児童・心理	t 検定
傷病時	3.3（1.64）	3.3（1.49）	n.s
心身の相談	1.5（1.98）	0.5（1.19）	***
係活動	2.1（1.90）	1.4（1.55）	*
つきそい	3.2（2.82）	2.6（2.13）	+

+p<.10　*p<.05　**p<.01　***p<.001

表14　養護教諭イメージの平均値（SD）

因子名	生活福祉	児童・心理	t 検定
（小学校）			
温かさ・魅力	47.4（7.30）	45.5（6.19）	n.s
勤勉・憧れ	42.1（6.45）	42.1（5.38）	n.s
働きがい	27.8（3.94）	27.1（3.73）	n.s
（中高校）			
温かさ	40.1（5.74）	38.7（5.53）	n.s
勤勉・有能	49.1（5.94）	48.4（4.92）	n.s
魅力	32.6（4.88）	31.2（4.78）	n.s

表15　仕事の重要性の平均値（SD）：小学校

因子名	生活福祉	児童・心理	t 検定
保健管理・保健指導	18.5（2.25）	17.1（3.00）	**
環境衛生・地域連携	7.5（1.38）	7.0（1.79）	+
児童への発信	8.5（2.09）	7.0（2.27）	***

+p<.10　*p<.05　**p<.01　***p<.001

表16　仕事の重要性の平均値（SD）：中・高等学校

因子名	生活福祉	児童・心理	t 検定
生徒への発信	10.5（2.62）	8.6（2.71）	***
専門的見たて	8.4（0.98）	7.8（1.45）	**
環境衛生	5.2（1.05）	4.59（1.28）	**
保健管理・保健指導	9.9（2.07）	8.9（2.24）	**

p<.05　**p<.01　***p<.001

表17　連携の必要性の平均値（SD）：小学校

因子名	生活福祉	児童・心理	t 検定
保健教育	10.2（3.03）	8.7（2.81）	**
組織対応	7.5（1.69）	6.6（1.93）	**
心のケア	5.5（0.84）	5.1（1.21）	*
健診・救急処置	7.7（1.39）	7.8（1.37）	n.s

*p<.05　**p<.01　***p<.001

⑷　養護教諭を志望した動機

動機について，表11のように３因子が得られた。第３因子は１項目から成っていたが，重要な因子として以後の分析で用いることとした。

３　生活福祉学専攻と他専攻の学生の比較

「保健室利用状況」「養護教諭イメージ」「養護教諭の仕事の重要性」と「連携の必要性」について，各因子に対応する尺度得点について，生活福祉専攻の学生と他学部（児童学・心理学）専攻の学生を比較するためにｔ検定を行った。

⑴　保健室利用状況

小学校の保健室利用状況では，表12のように，生活福祉専攻の学生の【傷病時・係活動】【心の居場所】の尺度得点が高かった。中・高等学校の利用状況でも，表13のように【心身の相談】【係活動】の尺度得点が高かった。

⑵　養護教諭イメージ

表14のように有意差はなかった。

⑶　養護教諭の仕事の重要性

小学校では，生活福祉学専攻の学生は，表15のように【児童への発信】【保健管理・保健指導】の得点が有意に高かった。中・高等学校でも，表16のように，全ての因子について，有意に得点が高かった。

⑷　連携の必要性

小学校では，表17のように【保健教育】【組織対応】【心のケア】で生活福祉専攻の学生の

表18　連携の必要性の平均値（SD）：中・高等学校

因子名	生活福祉	児童・心理	t 検定
保健教育・組織	14.7（3.97）	12.23（4.87）	***
心・感染症対策	8.2（1.08）	7.4（1.58）	***
健診・救急処置	7.7（1.54）	7.4（1.58）	n.s

*p<.05　**p<.01　***p<.001

表19　養護教諭イメージ得点の変化（小学校）

因子名	初回	最終	t 値	t 検定
温かさ・魅力	47.39 (7.19)	49.76 (6.82)	−3.909	***
勤勉・憧れ	42.14 (6.39)	44.76 (6.48)	−2.899	**
働きがい	27.92 (3.89)	29.20 (3.69)	−2.933	**

（ ）内は標準偏差　*p<.05　**p<.01　***p<.001

表20　養護教諭イメージ得点の変化（中・高等学校）

因子名	初回	最終	t 値	t 検定
温かさ	40.04 (5.47)	40.53 (5.89)	−.71	n.s
勤勉・有能	49.31 (5.63)	52.61 (5.97)	−4.13	***
魅力	32.45 (4.71)	27.88 (3.69)	7.97	***

（ ）内は標準偏差　*p<.05　**p<.01　***p<.001

表21　養護教諭の仕事（小学校）の尺度得点の変化

	初回	最終	t 値	t 検定
小学校：環境衛生・地域連携	7.55 (1.32)	7.98 (1.27)	−2.10	*
中・高等学校：保健管理・保健指導	10.20 (1.78)	9.43 (2.04)	2.74	***

（ ）内は標準偏差　*p<.05　**p<.01　***p<.001

得点が有意に高かった。中・高等学校では，表18のように【教育・組織】【心・感染症対策】において，有意に得点が高かった。

Ⅱ　講義による変化

生活福祉学専攻学生の授業の前後比較をするために，生活福祉学専攻の学生49名（前後で調査できた学生のみ）を対応のあるサンプルのｔ検定を行った。有意差が見られたのは，次の通りである。

⑴　養護教諭イメージ

小学校の養護教諭のイメージは，表19のように【温かさ・魅力】【勤勉・憧れ】【働きがい】の全てについて尺度得点が高くなっていた。しかし，中・高等学校では，表20のように【勤勉・有能】の尺度得点が高くなったが，【魅力】の得点は低くなり，【温かさ】は有意差がなかった。

⑵　養護教諭の仕事の重要性について

表21のように，小学校は【環境衛生・連携】の尺度得点が高くなり，中学校では【身体管理・保健指導】得点が低くなっていた。

Ⅲ　職務意識と養護教諭イメージ等のパス解析

生活福祉学専攻の学生49名に対して，２回目に調査した結果についてパス解析を行った。

⑴　保健室の利用と動機

今までの学校生活における「保健室を利用した理由」から「志望動機」「養護教諭になりたい気持ち」へのパス図を作成した（図１）。

小学校や中・高等学校に在学していたときに保健室を利用した理由（６因子）を説明変数（独立変数）としてパス解析を行ったところ，小学校の【心の居場所】，中・高等学校【心身の相談】が【小中高校でのよい経験】を高め，中・高等学校の【傷病時】がそれを低下させていた。そして，【小中高校でのよい経験】が「養護教諭になりたい気持ち」を高めていた。特に強いパスは中・高等学校【心身の相談】から【小中高校でのよい経験】へのパスであった。「保健室を利用した理由」が「志望動機」に与える影響の説明率は７～20%であり，「養護教諭になりたい気持ち」に与える影響の説明率は16%であった。

⑵　仕事の重要性・連携の必要性とイメージ

授業終了後の調査結果について，仮説に沿いながらパスモデルを作成しパス解析を行った。パスモデルの作成に当たって，「仕事の重要性」・「連携の大切さ」の要因以外に共通に影響する要因があると想定して，イメージの誤差間に双方向のパスを入れた。

パスモデルを作成しパス係数の有意でないものからパスを一つずつ減らしていった。その結果，最終的に適合性の高いモデルが得られた（図２，３）。図の中のパス係数はすべて５%レベルで有意であった。

図２から，小学校において，【温かさ・魅力】イメージについて，【児童への発信】の重要性

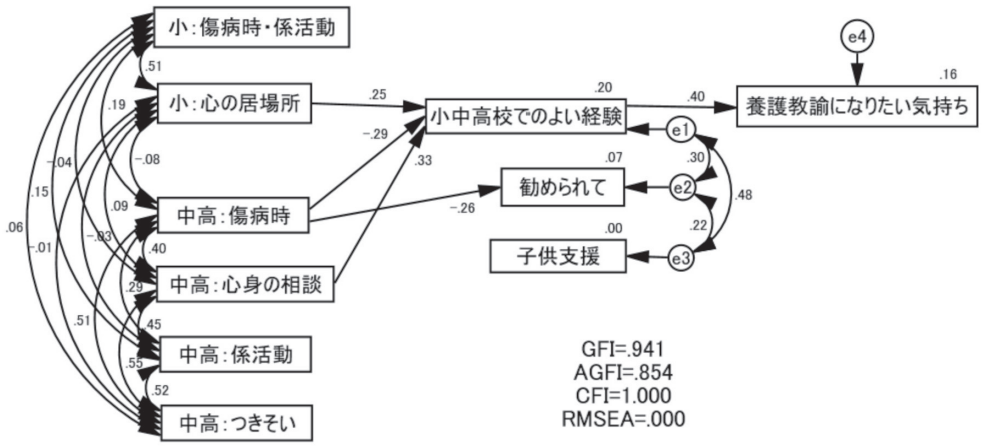

図１　「保健室利用理由」と「養護教諭になりたい気持ち」のパス図

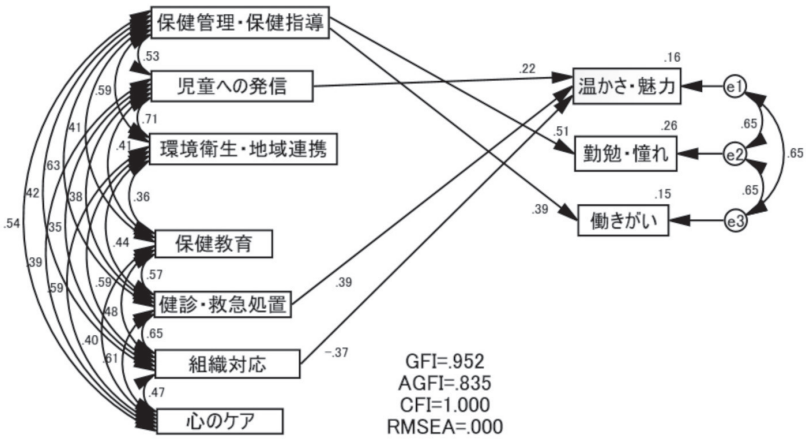

図２　小学校「仕事の重要性」「連携の大切さ」とイメージのパス図

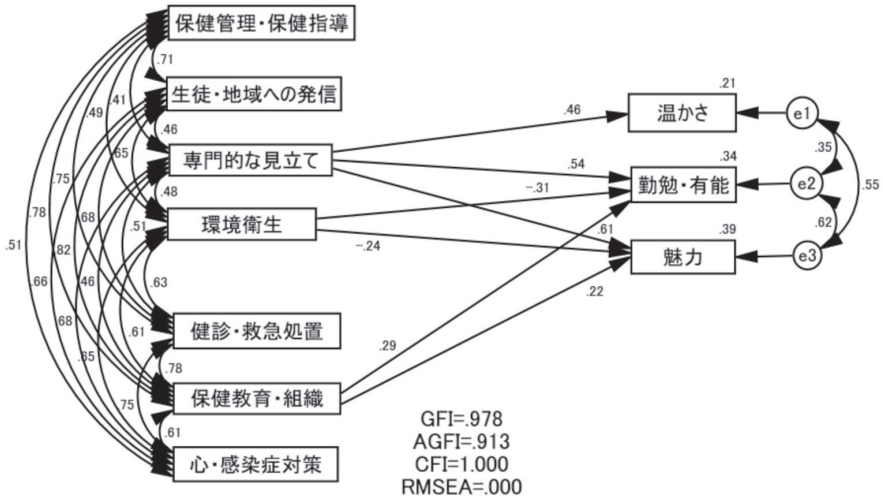

図３　中・高等学校「仕事の重要性」「連携の大切さ」とイメージのパス図

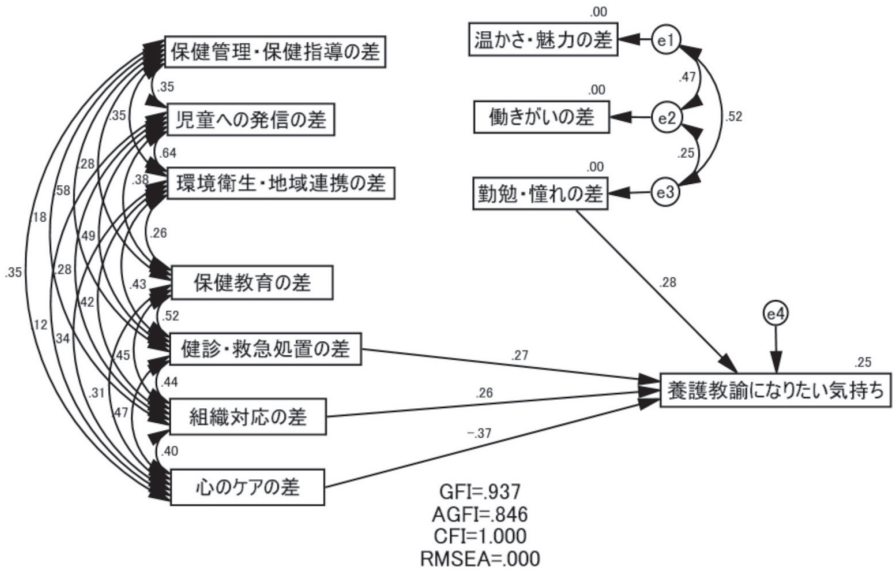

図4　小学校　授業前後の差「仕事の重要性」「連携の大切さ」「イメージ」と「養護教諭になりたい気持ち」のパス図

と【健診・救急処置】の連携の必要性が【温かさ・魅力】イメージを高めていたが，逆に【組織対応】の連携の必要性は【温かさ・魅力】イメージを低下させていた。【勤勉・憧れ】【働きがい】イメージについて，【保健管理・保健指導】の重要性が【勤勉・憧れ】と【働きがい】イメージをそれぞれ高めていた。特に強いパスは，仕事の重要性の【保健管理・保健指導】から【勤勉・憧れ】【働きがい】へのパスと連携の必要性の【健診・救急処置】から【温かさ・魅力】へのパスであった。職務がイメージに与える影響の説明率は15～26%であった。図３から，中・高等学校において，【勤勉・有能】イメージについて，【専門的な見たて】の重要性と【保健教育・組織】の連携の必要性が【勤勉・有能】イメージを高めていたが，逆に【環境衛生】の連携の必要性は【勤勉・有能】イメージを低下させていた。【温かさ】イメージについて，【専門的な見たて】の重要性が【温かさ】イメージを高めていた。【魅力】イメージについては，【専門的な見たて】の重要性と【保健教育・組織】，連携の必要性が【魅力】イメージを高めていたが，逆に【環境衛生】の連携の必要性は【魅力】イメージを低下させていた。特に強いパスは【専門的な見たて】から全てのイメージへのパスであった。職務がイメージに与える影響の説明率は21～39%であった。

これらのモデルとは別に，「仕事の重要性」「連携の大切さ」について潜在構造を仮定したモデルを作成しようとしたが，適合性の高いモデルは得られなかった。

⑶　授業の影響

図４図５は，授業後から授業前の「仕事の重要性」「連携の必要性」及び「イメージ」の得点の差を算出し，パス図を作成した。

図５から，小学校において，連携について，【健診・救急処置】【組織対応】の必要性の得点が高まるほど「養護教諭になりたい気持ち」を高めていた。逆に【心のケア】の連携の必要性得点が高くなるほど「養護教諭になりたい気持ち」を低下させていた。また，【勤勉・憧れ】イメージの得点が高くなるほど「養護教諭になりたい気持ち」を高めていた。特に強いパスは，【組織対応】の連携の必要性から「養護教諭になりたい気持ち」へのパスであった。職務やイメージが「養護教諭になりたい気持ち」に与える影響の説明率は25%であった。

図５から，中・高等学校においては【生徒・地域への発信】の重要性が高まるほど「養護教諭になりたい気持ち」を直接高めていた。【保

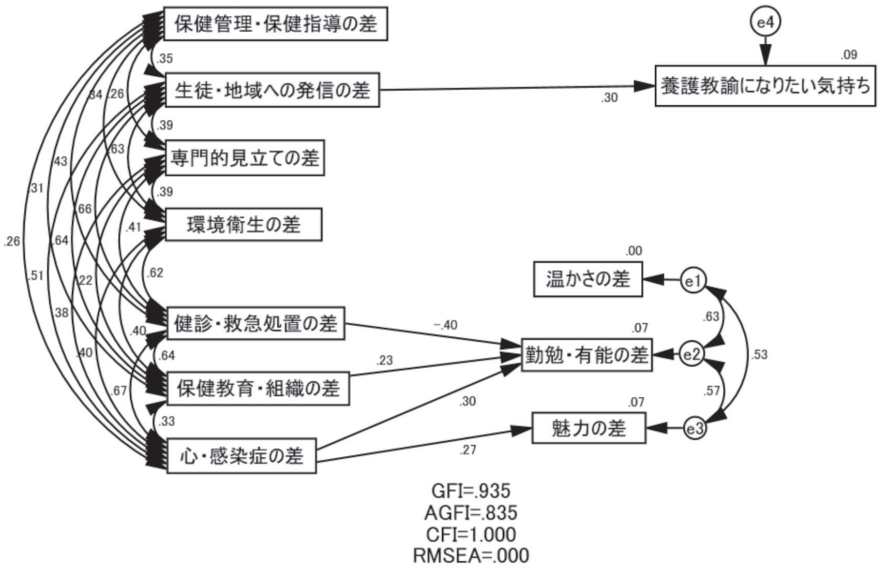

図5　中・高等学校　授業前後の差「仕事の重要性」「連携の大切さ」と「養護教諭になりたい気持ち」のパス図

健教育・組織】と【心・感染症対策】の連携の必要性が高まるほど，【勤勉・有能】イメージを高めていた。逆に【健診・救急処置】の連携の必要性が高くなるほど【勤勉・有能】イメージを低下させていた。特に強いパスは，【健診・救急処置】の連携の必要性から【勤勉・有能】イメージへのマイナスのパスであった。職務がイメージに与える影響の説明率は７％であり，「養護教諭になりたい気持ち」に与える影響の説明率は９％であった。

考　察

Ⅰ　養護教諭を志望する学生の特徴

1　他学部の学生との比較から

養護教諭を志望する学生は，他学部の学生より多く保健室を利用していた。その理由として，小学校では【心の居場所】，中・高等学校では【心身の相談】が多いことが明らかになった。また，仕事の重要性について，小学校では【児童への発信】【保健管理・保健指導】について，中・高等学校では全ての職務に関して養護教諭を志望する学生の得点の方が有意に高かった。さらに，連携の必要性について，小学校では【保健教育】【組織対応】について，中・高等学校では【保健教育・組織】【心・感染症対策】について養護教諭を志望する学生の得点が有意に高かった。これらの結果は，下村（2010）と今野（2004）と同様の結果であった。

しかし，養護教諭のイメージについては，専攻による有意差はみられなかった。

2　志望動機との関係

パス解析の結果，小・中・高等学校に在籍中に保健室に来室した理由の中で，最も志望動機に関係していたのが，【心の居場所】【心身の相談】であり，保健室に相談に行った際の養護教諭や保健室の雰囲気による【小中高校でのよい経験】を介して「養護教諭になりたい気持ち」を高めていることが示唆された。したがって，仮説１は支持されたと考える。

しかし，中・高等学校の傷病時の対応が「今までのよい経験」を低下させていることから，傷病時に来室したときの養護教諭の対応に不満足感を感じているのではないかと考えられる。一般的に小学校の保健室は温かい雰囲気で，養護教諭には保護して育てる役割が求められ，児童とは日常的に関わる機会が多いと考えられる。それに対して，中・高等学校に進むにつれ，生徒と関わる機会は減少し，養護教諭は生徒指導や進路指導も視野に入れながら対応をすること

が多くなり，温かさを中心とした対応をしにくくなる。小学校での温かな対応とのギャップから，中・高等学校での傷病時の対応は，学生にとって不満足感が残ったのではないかと考える。中・高等学校の養護教諭にとって，今後の課題といえるかもしれない。

Ⅱ　講義による変化

生活福祉学専攻（養護教諭を志望する）学生について，講義「教育方法概論」を通しての変化は以下のようであった。

1　授業前後の変化

授業の前後で比較すると，小学校では全てのイメージの得点が高くなった。中・高等学校では【勤勉・有能】イメージが高くなったが，【魅力】得点は低くなった。授業前の養護教諭のイメージは，学部による差がほとんど見られなかったことから，本講義による影響があったのではないかと考える。特に，中学校保健室の新聞記事を提供したことから現場のたいへんさを感じ，魅力が低下したのではないかと推測する。

仕事の重要性では，小学校では【環境衛生・地域連携】の得点が高くなった。講義において小学校のほけんだよりを提示し，学校保健委員会や学校医・学校薬剤師等との連携を紹介したことによるであろう。また，中・高等学校では【保健管理・保健指導】の得点が有意に低くなっていた。【保健管理・保健指導】は「保健管理」「健診」「保健指導（集団）」「保健指導（個別）」の職務内容であり，本講義では中・高等学校におけるこれらの職務の具体例を取り上げる機会が少なかったことによるのではないかと考える。

以上から，仮説２に関して，小学校は，【温かさ・魅力】イメージをはじめとした全てのイメージの得点が高くなった。一方，中・高等学校では【勤勉・有能】イメージの得点は高くなったが，【魅力】の得点は低下し，【温かさ】イメージは変化がなかった。また，仕事の重要性については一部のみが高くなったにとどまり，連携の重要性については変化がなかった。

2　授業後の「仕事の重要性」「連携の必要性」と「養護教諭イメージ」との関係

⑴　小学校

仕事の重要性について，養護教諭の主たる職務といえる【保健管理・保健指導】の重要性が【勤勉・憧れ】【働きがい】イメージを高め，本講義の目標である【児童への発信】の重要性は【温かさ・魅力】イメージを高めていた。連携の必要性では，【健診・救急処置】が【温かさ・魅力】イメージを高めていたが，逆に【組織対応】の重要性が【温かさ・魅力】イメージを低下させていた。【組織対応】とは，「感染症予防」「環境衛生」「校内組織活動」というおもてにでにくいが，学校保健においては要ともいえる重要な職務である。連携の重要性は感じていても，実際に学生自身が対処できるかと問われれば躊躇するであろう。そのため，学生は現実を知って負担感を持ったのかもしれない。

⑵　中・高等学校

【専門的な見立て】の重要性が，【温かさ】【勤勉・有能】【魅力】の全てのイメージを高めていた。【専門的な見立て】は，「救急処置」「心の相談」「配慮の必要な生徒対応」であり，養護教諭の専門性が問われる。小学校とは異なり，心の相談の対応が増加する中・高等学校の様子を踏まえた回答であったと考える。逆に，【環境衛生】の重要性は【勤勉・有能】【魅力】イメージを低下させていた。小学校の【組織対応】と同様に負担感を感じたのかもしれない。

連携の必要性では，【保健教育・組織】が【勤勉・有能】【魅力】イメージを高めており，講義の成果があったと考えられる。

なお，本調査の因子分析で明らかになったこととして，「保健指導（個別）」と「保健指導（集団）」が全て同じ因子に含まれており，学生は「保健指導」の個別と集団の意味を同じように捉えているのではないかと考えられる。「保健指導（個別）」は児童生徒個々の心身の相談を行い，「保健指導（集団）」は集団を対象として保健教育を行うものである。久保・森下（2011）に行った現職養護教諭対象の調査では「保健指導（個別）」は「心の相談活動」と同じ

因子に含まれ，「個別指導（集団）」は「保健の授業」と同じ因子に含まれていた。２回生の時点では，養護教諭の職務内容についての理解が十分でないと推察された。

３　授業前後の得点差の影響

連携の大切さにおいて，小学校では，【健診・救急処置】【組織対応】得点の増加が「養護教諭になりたい気持ち」を高めていた。逆に【心のケア】得点の増加は「養護教諭になりたい気持ち」を低下させていた。【心のケア】因子は，「心の相談」と「配慮の必要な児童への対応」であり，講義の冒頭に取り上げたテーマとも重なる。実際に学生自身が対処するには困難が伴うことが予想されるため，【心のケア】得点の増加は「養護教諭になりたい気持ち」を低下させたのではないだろうか。

中・高等学校では，【生徒・地域への発信】の重要性得点の増加が直接「養護教諭になりたい気持ち」を高めていた。【生徒・地域への発信】因子は，「生徒保健委員会活動」「保健の授業」「ほけんだより」といった保健教育に関わる職務を含み，本講義の目標と重なっている。さらに「組織活動」「地域等連携」という職務をも含んでおり，本研究を通じて学生に意識させたかった「連携の大切さ」とも重なることから，成果があったと考える。

連携の大切さでは，【保健教育・組織】【心・感染症】の得点の増加が【勤勉・有能】イメージを高め，【心・感染症】の得点の増加は【魅力】イメージも高めており，仮説３を支持する結果であった。しかし，【健診・救急処置】の連携の大切さ得点の増加は【勤勉・有能】イメージを低下させていた。【健診・救急処置】において連携が大切であるという意識は高まったが，初回調査で中・高等学校の養護教諭に対して抱いていたイメージが払拭されなかったということであろうか。

以上のように，仮説３については，小学校では本研究の目的とした「連携の大切さ」に関して，その内容によって「養護教諭になりたい気持ち」を直接高めたり低下させたりしていた。【勤勉・憧れ】イメージの増加は，「養護教諭になりたい気持ち」を高めていた。また，中学校では，本講義の目的である【生徒・地域への発信】が「養護教諭になりたい気持ち」を直接高めていた。したがって，仮説３は支持されたと考える。

しかし，一方では，養護教諭になりたい気持ちが高い学生の場合，そもそも学ぶ意欲が高く，授業によってより多くの影響を受け，養護教諭イメージや職務に関する得点が高く変化したのかもしれない。本研究では，最終回だけに「養護教諭志望の程度」を調査したが，授業の前後で調査してもよかったと考えている。

Ⅲ　今後の課題

本研究では，教育方法概論の講義のなかで，現場の具体的な事例を短時間継続的に提示することによって，学生の意識がどのように変容するかを探ることを目的とした。本講義を担当して５年になるが，学生から現場の様子を知りたいという要望は大きく，学生の声に応える形で授業と研究を進めた。しかし，前期後半のわずかな期間に，短時間の指導を重ねただけであり，その成果があったかどうか断言することはできない。また，取り上げたテーマも適切であったかどうか定かではない。さらに，本講義を受けた時期に，他の専門教科をどの程度受けていたのか，そのことが影響している可能性もある。

瀬戸（2002，2003）は，中・高等学校での調査結果から，「養護教諭はコーディネーションを担うことが少なく，コーディネーションの基盤となる能力・権限において自己評価が低かった。心理教育的援助サービスにおいて重要な存在でありながら，コーディネーション行動に参加していないことが示唆された」と述べている。養護教諭への期待の大きさを考えさせられるとともに，養成教育や現職研修の課題ともいえる。

文部科学省は，着任時から教員に支障が生じないように，平成22年度入学者から教職免許状取得に必要な科目として「教職実践演習」を導入した。鹿間（2014）は，「養護教諭のジレンマ」という教育実習で経験した事例を通して，

将来，教職生活をより円滑にスタートできるように試みている。

教員の中でも，養護教諭は一人職種であり，その職務を理解されにくいとともに，教職員をはじめ学校医や学校内外の関係機関と連携しなければ職務の円滑な遂行は難しいという特徴を持っている。学生には，養成教育の様々な機会に，このような養護教諭の職務の特徴を理解して欲しいと願っている。

謝　辞

本論文の作成にあたり，ご助言ご指導頂きました 京都女子大学大学院 発達教育学研究科 教授　森下正康先生には，心より感謝いたします。

引用文献

吾郷ゆかり（1996）．看護学生の看護婦イメージ—動機と性格特性との関連における分析—島根県立看護短期大学紀要，**1**，17−23.

後藤多知子・萩原琴弥・後藤和史（2011）．養護教諭志望学生における養護教諭に対するイメージの変容　瀬木学園紀要，**5**，32−37.

今野洋子（2004）．大学生の持つ養護教諭および保健室の印象—A大学の学生を対象とした調査から—　日本養護教諭教育学会 第12回学術集会，52−53.

石原昌江・宮家美由紀・池田知美（1998）．保健室での子どもの行動と養護教諭の対応に関する研究　岡山大学教育学部研究集録，第107号，131−139.

木村由紀子・大坪治彦（2008）．児童生徒における保健室のイメージに関する研究⑵ —小学生と中学生の比較を中心に—」，日本教育心理学会総会発表論文集，50，107.

久保昌子・森下正康（2011）.養護教諭の職務意識に関する調査研究—校種・学校規模・経験年数による差異—　京都女子大学発達教育学部紀要，第７号，57−66.

松田芳子・竹中由香里（2006）．小学生を対象とした養護教諭および保健室についての意識調査熊本大学教育学部紀要，人文科学大55号，207−214.

満田タツ江・今村朋代（2006）．養護教諭のイメージに対する志向性や適性感の変化　鹿児島女子短大紀要，第41号，193−202.

森　昭三（2002）．変革期の養護教諭　大修館，pp.194−197.

永浜明子・宮城政也（2005）．看護大学生の養護教諭に関する認識変化—養護教諭一種免許取得希望者を対象として—　沖縄県立看護大学紀要，第６号，64−72.

野尻雅美・真鍋淳子・中野正孝他（1994）．看護学生の看護婦イメージの研究—大学生と短大生の比較—　看護教育，(35) **6**，427−433.

大谷尚子・堀江宮子（1985）．養護教諭志望学生の養護教諭志向に関する研究-養護教諭課程への志望動機と在学中の志向の変容について—茨城大学教育学部紀要（教育科学），34号，213−229.

瀬戸美奈子・石隈利紀（2002）．高校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力及び権限の研究—スクールカウンセラー配置校を対象として—　教育心理学研究，**50**，204−214.

瀬戸美奈子・石隈利紀（2002）．中学校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力及び権限の研究—スクールカウンセラー配置校を対象として—　教育心理学研究，**51**，378−389.

鹿間久美子（2014）．養成教育の立場から　京都女子大学生活福祉学科 公開講座資料

下村雅昭（2010）．養護教諭養成課程を希望する学生の志望動機と養成科目に対する関心度　京都女子大学生活福祉学科紀要，第６号，19−22.

註

1）宮浦　徹（2014）．シリーズ46　健康教育をささえる～学校医の現場から～色覚健診の現状と課題　学校保健（日本学校保健会）306号，４－５.

2）加藤静允（2003）．現代のことば　学校での予防注射が無くなった　京都新聞　５月２日朝刊

3）日本教育新聞（2012）．現場の本音　中学校の養護教諭②もっと連携したい　６月11日

4）京都新聞（2008）．保健室登校　子どもが問いかけるもの　７月29日朝刊

5）京都新聞（2013）．子どもの色覚異常　自覚に遅れ　10月29日朝刊

6）村上八千世（2011）．教育を考える　うんこへの偏見「大きな便り」健康の証し　京都新聞２月19日朝刊

7）京都新聞（2014）．日曜社説　食物アレルギー　給食が問う「命と教育」　６月８日朝刊

8）小谷智恵（2014）．くらし　ぽっぽ便り③就学時健康診断　声かけて保護者の不安共有　京都新聞５月19日朝刊

9）金子由美子（2004）．くらし　自立の大地が揺らぐ〈24〉増える保健室登校　反抗期こそ「手当て」が必要　京都新聞12月16日朝刊

10）京都新聞（2007）．よくある病気と我慢しないで過敏性腸症候群　子どもの不登校の一因にも　10月９日朝刊

11）佐々木好美（2011）．ほけんだより　あおぞら　京都市立砂川小学校４月

12）島田妙子（2013）．虐待を超えて③アカンもんはアカン　真っ暗なトンネル出た　京都新聞12月15日朝刊

13）笹森理絵（2007）．今，言いたいこと　学生時代を振り返って　特別支援教育研究（日本文化科学社）No.559，７月号，58.
14）太田敦子（2012）．取材ノートから　チャイルドライン　安心して悩み語れる場を　京都新聞９月30日朝刊
15）徳永　進（2004）．野道をゆけば…㉕サイコロ道　きょうの健康（NHK出版）４月
16）佐々木好美（2014）．ほけんだより　あおぞら　京都市立砂川小学校６月